

終戦後今まで八回、ビルマに慰霊巡拝に行きました。恩人宮本曹長戦死の地は治安が悪く、残念ながら行けませんでした。

私達の連隊長・第一二連隊長棚橋大佐は「号作戦」の時、無線機破損のため連絡取れず、独断撤退したのが抗命と見られ、辻参謀に詰問され内地召喚となりました。

戦後進駐軍は連隊のマユ半島ブチドンにおける戦闘を称賛し、詳細を聞こうとして召喚されたことを大佐は戦犯容疑と勘違いし割腹自殺しました。進駐軍は大いに惜しんだとのこと。プチドンの勇戦はGHQの評価を得たのです。

私の体験談を少しでも皆さんに聞いて貰いたく、「テープ」に収めて、あちこちの集会の席上で、私の拙い話を聞いて頂いております。

亡くなった宮本曹長、金田軍曹等戦友の御霊安かれと偲びつつ、生業である農業に励みつつ、地域の皆さんのために少しでも役立とうと思ひ、老

人クラブ等の世話役をやらせて貰っています。

悲惨なり！ ビルマ戦線

兵庫県 戸田 義明

私は天下の名城、姫路城を朝な夕な眺めて育ちました。家族は両親の下に、私が長男で第三人、妹二人の八人家族でした。住居は、第十師団司令部のある市の中心部で、城南に練兵場があり、歩兵第三十九連隊と師団通信第十連隊があり、城北には広い練兵場が、東西南北それぞれ一キロメートルで、北の半分が騎兵第十連隊、野砲兵第十連隊、輜重兵第十連隊がありました。なお工兵隊の第十連隊と歩兵第十連隊は岡山にあり、鳥取、島根の一部を含む歩兵第六十三連隊が第十師団管区でした。

幼少の頃から兵隊さんの軍靴の響きを子守歌のようにして成長しました。練兵場に蛙やトンボを

採りに入っても、中心部の方へ行くと親に叱られました。

因みに第十師団管区にも、終戦時までの編成部隊は、第十師団（鉄兵団）、第五十四師団（兵兵団）、第二一〇師団（鷺兵団）、第十七師団（月兵団）等々があり、それぞれ天下に勇名を轟かせ善戦激闘しました。終戦時には第十師団管区の関連部隊は、「赤穂」「金剛」「総武」「山城」「那智」「護朝」「護路」「国」「樺」等々の符号がついていたと聞きました。

兵庫県青野ヶ原、岡山県日本原、蒜山高原、鳥取県大山山麓から根両方面及び弓ヶ浜半島に海軍基地並に航空隊基地等々があり、軍部の暴走で、全国民、人も物資も動員され、全国土は戦場と化し、一億玉砕覚悟の様相でした。

私は十八歳で志願して軍人になりました。検査結果は甲種合格で、その年の暮れ近い頃に入隊し

ました。「輜重兵第十連隊第三中隊へ入隊せよ」の通知が来ました。自宅から徒歩で数分の所に部隊があり、軍人の出入り、訓練の様相を絶えず見聞きをしておりました。それで完全に把握していると思いきや軽い気持ちで入隊しました。ところが意に反して厳格そのもので吃驚しました。

教官からの訓示は「上官の命令は天皇陛下の命令だ。絶対服従。貴様等は志願兵だ。生命を君国に捧げるべくして入隊したのだ。他の軍人の範となるべし。精励せよ」でした。教育係下士官が教官以上に張り切って、強い言葉で激励されました。次に教育係の助手の古参兵が（これが一番苦手だった）起居は勿論、軍人勅諭に始まり、典範令、刑法懲罰令に至るまで、頭に入れるでした。しごかれました。

輜重隊は、古く明治の日清、日露戦役以来「輜重輸卒」を指揮するのが輜重兵でした。輸卒とは完全な弾薬、糧秣、薬品等の運搬を行うのみで、

戦場に立ち向かって行かないのです。その彼らを護り、その業務を完うさせるのが輜重兵でした。

昭和十五（一九四〇）年より輜重兵連隊の任務に大改革が行われ、従来の臂力搬送、馬力搬送、馬輜搬送を機動力重点に代え、自動車隊を増設し、今までの挽馬二個中隊増設で輜重兵第十連隊と格上げされました。同じ頃に騎兵隊が搜索連隊と改編され、今までの軍馬一本槍から、自動車と軽戦車に変わったのです。自分達は第一期の自動車兵でした。

厳しい第一期の検閲も終了。中隊長より呼び出され「貴君は実に良く頑張っておる。知ってのごとく自動車隊は誕生したばかりだ。幹部が不足している。ぜひ下士官候補者として受験せよ」でした。同じ軍隊で飯を喰うのなら、兵より上官の方が「責任は重い、良かるう」と下士官候補生教育を受け、見事合格でした。

東京の戸山学校で下士官教育を受け、新設自動

車教育が増えた関係で教官も一生懸命でした。自分達生徒も遅れをとるなど必死に頑張りました。昭和十五年の秋風が吹く頃に、陸軍伍長の新しい襟章をつけて原隊へ復帰しました。同期の戦友では、最優秀者が一選抜の上等兵で、他はすべて一等兵でした。諸勤務に責任が重なるため、一心不乱に精励あるのみでした。

昭和十八年六月まで中部第五十四部隊第三中隊にて、現役兵、補充兵、教育召集兵等を入れ替わり立ち替わり教育係下士官として勤務しました。

「山本五十六元帥、南国の空に散華」され国葬が取り行われました。南方戦線の戦闘が激化。中国大陸も南北全域に戦線が拡大し、ビルマ、フィリピンの独立やマレー、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベス等々大東亜共栄圏構想と共に全方面に多量の軍隊が出動となりました。自分達の第五十四師団は兵団秘匿号は「兵（ツワモノ）」で出動しました。

営庭より歩武堂々と行進し、多くの知人友人に

見送られました。護国神社に戦勝祈願を行い、城南練兵場に各部隊が集結しました。姫路駅頭より列車に乗り込み宇品まで直行、輸送船に各兵科、兵団毎に乗船しました。ドラの音を後にして出港しました。時に昭和十八年の夏でした。

関門海峡を通過して五島列島から沖繩列島の島影に寄り添うごとく南進し、台湾に寄港し給水等を行いました。南シナ海では敵の攻撃に対処する「対空・対潜」の監視哨を数多く配備して南進しました。そしてシンガポール港に到着しました。輸送船団の半数は兵員を上陸させて、空船に現地諸物資を満載して内地へ搬送する由。自分達の乗船は、そのままマレー半島の西海岸のインド洋を北上し、マルタバン湾からビルマのラングーンへと海上輸送され、無事上陸できました。

全車輜揚陸と同時に、各中隊、時には小隊単位で、自兵団の弾薬、糧秣、薬品等を奥地の前線基

地へと、輸送に昼夜兼行で敢行しました。

日本軍空軍力は低下の一途を辿り、払暁から日没まで、敵機の爆音に最大の注意を払っての行動となりました。時あたかもインパール作戦の開始をにらんで、米支連合軍が優秀な火器を持って進軍して来ました。空軍も三千機を有していました。英印連合空軍も千機である。その上、曳行グライダー八〇機で、後方に降下するという戦法を敢行してきました。敵ながら天晴です。

制空権は完全に敵の掌中にあり。これよりは「名譽な転進」に非ず、「不名譽な退却戦法」をとることとなりました。ビルマは南にインド洋、西に英領インド、北に中国、東にラオスとタイ、その南に細長くマレーシアがあり、一番南端がシンガポールという。国内はイラワジ河が、ラングーンから中国の国境が分水嶺で、その水量は満々たる大河です。東部にサルウィン河がありこれも大河です。水源は中国雲南省です。

山脈は西にアラカンの大密林山脈があり、東に

シャン山系が聳え立ち、中間にベグー山系がある。シャン山とベグー山の中間にシタン河が流れ、かなりの水量です。これらの河川沿岸は当然のごとく集落ができ、街となる。大河イラワジも上流で二つに分かれ、チンドウイン河も大河だ。これはインドとの国境近くを流れる。勿論国境線は急峻なジャングル山岳地帯です。インパールへの進攻、撤退は机上の作戦でした。

当時のビルマ出陣の部隊は（秘匿名）

ビルマ方面軍「森」

「林」軍下 「祭」「烈」「弓」他直轄

「策」軍下 「兵」「牡」他直轄

「昆」軍下 「菊」「竜」「高」他直轄

「安」「敵」

方面軍直轄 「狼」「貫徹」「敢威」

その他等々三十二万余の皇軍が、それぞれの戦場において「地獄絵」を体験しました。

因みに戦没者十九万八百九十九柱、生還者十三

万七千余人（戦誌より）。ビルマ全戦場で各兵科は任務以上の大活躍しましたが敗退しました。

懐古

南冥の 廟の国に 散り逝きし

いくさ敗れて 戦友かえらず

（戦友詠ず。吾も共感す）

アラカン山脈 エンジンの唸りは高く

補給路は 七曲がり尚も登りぬ

降れば泥濘 吹けば砂 弾は恐れぬ

おれたちも 泣けた悪路の幾百里

よくぞ ここまで乗り越えた

流石自慢の 自動車隊

爆音は 今宵聞こえず 山深み

仰ぐ中天 十字星煌めく

絶壁の 真下ライト 点々と

闇の峠路 きらきら続きぬ

密林に 交通哨の灯一つ

ほのかに見えて 補給路尾根に入る

戦友は 皆不眠の疲れ 血走る眼

確かなハンドルを握る

千尋の 谷に朝霧 湧き立ちて

徹夜輸送の 明けゆかんとす

ほのぼのと 明けゆく山波 はてしなく

アラカン連山 紫に映ゆ

軍馬の戦い

ペグー山中に入って間もなく、砲車を牽く軍馬を見る。御者に尻を鞭打たれ、口角泡を吹きながら砲車を牽く。車輪は泥に捉えられ轍痕は動かさない。突然、御者は馬の背に跨り姿勢を正し、片手を中天に挿頭し「前へ！ 進め！」と鋭く号令する（あたかも平時の馬匹訓練のごとく）。

軍馬は聞き耳を立て、号令一下、渾身の力を四股にかけ砲車を牽く。砲車は一瞬なるも動いた。

さらに御者が号令を発する。軍馬は懸命に砲車を牽く。この状景にして悲壮感溢れる。

まさに鬼神も哭く軍馬の死闘である。自分は暫

時戦線を忘れ（物言わぬ軍馬に有難う）、その後この軍馬に再見せず、異国の地にて草むす屍となられたと思う。不憫の一語につきる。

行けども行けども生い茂る竹林と雑木林が続き、降りしきる雨は肌をぬらし、身体を横たえる場所もない。前者におくれぬように追隨し、進路は泥濘が脚をさらう。路傍には力尽き果て地に伏す戦友の屍、幾百千後を断たず。これぞまさに現世の地獄絵である。

昭和二十年七月二十三日未明、朝霧の中に、降り続く長雨、シッタン河は兩岸を突き破るがごとく、激流渦巻き滔々と流れる。まるで魔物の潜むかのごとし。

夕景となり、残月の薄明かりでおぼろげながら対岸の村ザロキが見える。先兵は筏で渡河決行せよと、六人一組で、木竹を組み合わせて装具を乗せ、各自は水中に入り、片手で筏に取りすがり、残る片手と体力で一生懸命に櫂となり進む。

かほそくやせた腕や足に全力を出して激流に押し流されながらも前進する。水中に呑まれた者は数知れない。

対岸で小舟一隻を確保、十人位が乗れる。両舷に腰を落として、片手を水中に差し伸ばして權となし懸命に漕ぐ。将も兵もなし。全員力闘して濁流を乗りきり進む。流木等に衝突すると転覆だ。運を天にまかせて協力作戦だった。

先遣隊の誘導よろしく渡河成功。付近の反乱軍を撃退し同地区を確保す。本隊は悠々と渡河成功となる。

停戦命令が出たと知らされ、真偽の程は不明であった。数日後に英印軍によって武装解除された。収容所を再三転々とした。

メーカーラー収容所で、中央に一本の柳のような木があり、ちょうど格好の集会所だった。あの日のこと、一人の男がこの木の根元辺りが少し「黄色だ」と言い出した。見れば誰の目にもはっ

きりと黄色である。シャベルで掘った。約五十七センチ程の所から白骨の遺体が出た。日本人の遺骨だと判明した。傍らに腐蝕した対戦車地雷があったからだ。俗にアンパンと呼ばれ、最も強力な戦車地雷で、丸い扁平な形をした黄色火薬爆弾であった。

彼は任務を遂行し、敵戦車に肉迫攻撃を敢行、身は敵弾に倒れ、爆薬と共に今この国の土と化せしか。遺骨を収集し、全員の祈りの中茶毘に付し、英軍の手で日本に送り返してくれるように手配を依頼した。認識票もなく、彼にも親が有っただろう。時には妻子があるかもと、思えば心は千々に乱れた。ただ御冥福を祈るのみでした。

待ちに待った復員の日が来た。キャンプ撤収後、予定された列車の乗車場所へと行進し、しばらく列車到着を待った。線路脇に、現地人の老若男女が約三十人程、私達を見送ってくれていた。皆「日の丸」の小旗を持って小さな声で「勝って

くるぞと勇ましく」の軍歌を唄ってくれました。
この集落の人たちには、日本軍は良い事を行い、
好印象を与えたのだ。

別れを惜しんで手製の「日の丸」と軍歌での見
送り。私は、心中深く感謝の礼を申し上げ、手を
振って「さよなら！」と叫んだ。

ラングーン港より字品へと復員完了です。

遠くビルマの果てまで

福島県 庄 司 武 夫

私は、大正十二（一九二三）年四月十日、福島
県耶麻郡熱塩加納村大字米岡字中川原戊において
生まれました。

昭和十八（一九四三）年徴兵検査で甲種合格、
陸軍の野砲兵となりました。昭和十八年四月十
日、仙台野砲第二連隊第四中隊第四班へ現役入営
です。

私が入営した当時の私の家族の状況は、

父 健在 農林業

母 健在 農林業

長兄 健在 中支へ従軍出征中

次兄 健在 会津鋳業会社従業員

本人 健在 会津鋳業会社従業員

という訳で、私が兵役のため家を抜けることは、
経済的に楽ではなかった。

さて、入営に当たっては戦争初期のような賑や
かで盛んな歓送はなく、実父と二人のみで加納駅
から会津若松―郡山―仙台と列車に乗り、衛門前
で父と別れ第四中隊へ入営。内地部隊には四カ月
間入隊し、ビルマにいた勇第一三〇七部隊へ転属
になりました。

内地にいた期間は要約すれば「根性」で頑張り
通しました。入営前に村の年寄りや兄貴分の在郷
軍人の人々から、種々と軍隊について耳にタコが
できる程、人の嫌がるひどい、つらい生活と言う
ことを聞いていた。何くそ男なら頑張って「根性